

## < 研究論文 > 高等学校におけるこれからの古典文法教育 : 古典語助動詞の図示化を通して

著者	永島 誠
雑誌名	日本文学文化
巻	17
ページ	1(76)-10(67)
発行年	2018-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00010573/">http://id.nii.ac.jp/1060/00010573/</a>

# 高等学校におけるこれからの古典文法教育

—古典語助動詞の図示化を通して—

永 島 誠

## 1. はじめに

昨今、社会は加速度的に変化し、将来の予測が困難な状況となっている。人工知能やロボットの発達により、子供達の65%は将来、今は存在していない職業に就くと言われ、あるいは、今後10年から20年程度で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高いとも言われている<sup>(1)</sup>。

予測困難なこれからの社会を子供達がたくましく生きていくために、中央教育審議会は、2016年12月21日に取りまとめた答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」において、子供達に次のような能力を身につけさせるべきであるとしている。すなわち、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、社会や人生をどのようにより良いものにしていくのかを自ら考え、主体的に学び続ける能力、あるいは、試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして新たな価値を生み出していく能力である<sup>(2)</sup>。こういった能力を育てるため、次期学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が重視される。今後の授業スタイルは、教師が数十人の子供達の前で一時間話し続けるというものではなく、子供達が自ら学習に取り組み、仲間との対話を通してその学びをさらに深めていくというものになる。今後の国語教育を考えていく上では、まずこのことを念頭に置いておかねばならない。

## 2. これからの古典教育

次に高等学校におけるこれからの古典教育について考えてみる。2017年9月1日現在、次期高等学校学習指導要領の告示はまだなされていないが、先に掲げた中央教育審議会答申の別添資料2-4「高等学校国語科改訂の方向性」<sup>(3)</sup>では、高等学校国語科の科目は「現代の国語」「言語文化」の2つの共通必修科目と、「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探究」の4つの選択科目に改訂されることとなっている。本稿で論じようとしている古典については、「言語文化」「古典探究」で学ぶことになる。先の資料によれば、「言語文化」は、上代（万葉集の歌が詠まれた時代）から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目、「古典探究」は、古典を主体的に読み深めることを通して、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探求する科目とされている。また、文部科学省（2016）中央教育審議会教育課程部会国語ワーキンググループ（第5回）配付資料3の中の「高等学校国語科科目構成の検討について（主な意見）」には、「言語文



#### 4. 助動詞「む」の「文構造式」

助動詞「む」について、『あゆひ抄』には次のようにある。

未だ然あらぬ事をはかりあらまして言ふ言葉なり<sup>(12)</sup>

「あらます」とは、前もって「こうなるだろう」と予想する、思い巡らすという意味である。つまり、「む」とは、「未だ然あらぬ事柄＝まだ実現していない事柄」について、前もって「こうなるだろう」と予想するときに使われるものである。例えば、

鶯の笠にぬふといふ梅花折りてかざさむおいかくるやと（古今・春上・36）

という歌がある。この歌における「梅花折りてかざす」が表現者にとって「未だ然あらぬ事」、すなわち「まだ実現していない事柄」である。図示すると、

未だ然あらぬ事  
梅花折りてかざさ→む

というように、その事柄を「はかりあらまし」て「む」と言うのである。これが『あゆひ抄』から導き出される「文構造式」である。

また、学校文法では、「む」には「推量」や「意志」や「勧誘」などの意味があるとされている。それを図示すると、

未だ然あらぬ事  

雨 降ら	→む（雨ガ降ルダロウ＝推量）
我 せ	→む（私ガシヨウ＝意志）
（いざ）行か	→む（サア行コウ＝勧誘）

となり、文構造自体は変わらない。人称の違いで意味が変わるのであり、いずれにせよ「まだ実現していない事柄」を「はかりあらまし」すときに「む」が使われるのである。すなわち、助動詞「む」が述語として現れた時の「文構造式」は

まだ実現していない事柄 →む

ということになる。

「[む]には『推量』、『意志』、『勧誘』、『婉曲』の4つの意味がある」という説明だけでなく、生徒はそれぞれの意味をバラバラに覚えることになる。しかし、「[む]は『まだ実現

していない事柄』を言う時に使う助動詞である」というように、4つの意味に共通する概念を併せて図示する。そこで初めて、生徒の頭の中で「推量」「意志」「勧誘」「婉曲」が一つに繋がるのである。

#### 5. 助動詞「まし」の「文構造式」

助動詞「まし」について、『あゆひ抄』には次のようにある。

あらまし出だしたる事にやがてたゞしく向かひて言ふ心あり<sup>(13)</sup>

すなわち、「まし」は「あらまし出だしたる事＝表現者が予想した事柄」を述べるときに使用する助動詞だということである。

また、成章は「まし」について、

「濁るは」を受けてあらます事ことに多し。引歌の「絶えて桜のなかりせば」、同じき「けふ来ずは」の類なり。<sup>(14)</sup>

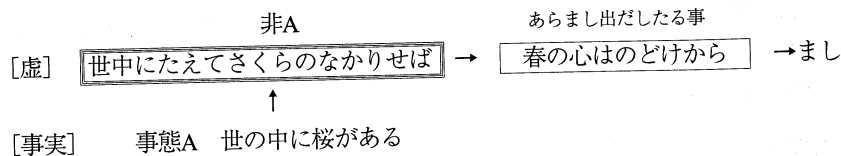
とも述べている。「濁るは」とは、未然形に接続して仮定条件を表す接続助詞の「ば」のことである。すなわち、『あゆひ抄』から次のような文構造が導き出せるだろう。

☆ あらまし出だしたる事  
世中にたえてさくらのなかりせば 春の心はのどけから→まし（古今・春上・53）

さらに、成章の息子富士谷御杖は、父の説を受けて、その著『脚結玄義』（1821）の中で次のように述べる。

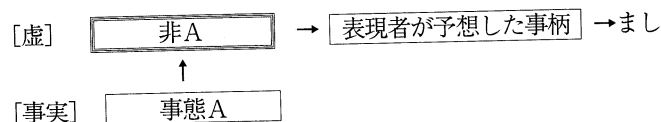
んはその事実なりましはその事虚なるかたかへりたとへは世中にたえて櫻のなかりせはなと設出たる事の末をいふなりされはもしかくあらはといふことの行末を云なり未然をいひて今の事を思はする手段なり<sup>(15)</sup>

「ましはその事虚なる」「行末」という文言が注目される。すなわち、御杖によれば、「まし」という助動詞は、「世中にたえてさくらのなかりせば」という「虚（事実でない）」場面を設けて、そこから想定される「行末＝春の心はのどけし」を述べることによって「今の事（現実の事）を思はする」ものなのである。すなわち、御杖は父成章の説を発展させて、世に言われる「反実仮想」という概念を提唱したのである。二人の説から導き出せる文構造を、先に掲げた和歌に当てはめると次のようになる。



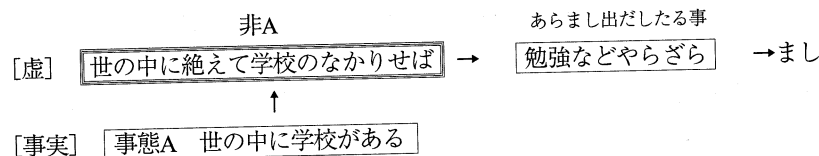
この歌の詞書には「なぎさの院にてさくらを見てよめる」とある。つまり、表現者の目の前には、「桜がある（事態A）」という動かしがたい事実がある。その事実を心の中で拒否し、その事実がなかった場面（非A＝世の中に絶えて桜がなかったならば）を想定し、その場合起こるであろう事柄（あらまし出だしたる事柄＝春の心はのどけし）を心の中に描いて述べる。そうすることで、「今の事＝世の中に桜があるせいで春の季節は人々の心が穏やかでない、という現実」を暗に匂わせる。これが「まし」の用法である。

従って、「まし」が述語として現れた時の「文構造式」は、



ということになる。

さて、「反実仮想」という概念を生徒に理解させるため、



といったように、「文構造式」を使って、生徒に身近な例を挙げさせて古文を作らせたことがある。少しでも古典文法に興味を持ってもらえるよう行った取り組みである。

## 6. 助動詞「らむ」の「文構造式」

成章の理論も完璧ではない。助動詞「らむ」について『あゆひ抄』には次のようにある。

見えたる物と・隠れたることわりとを合はせて詠めり<sup>(16)</sup>

結論から言ってしまうと、この成章の説明は、いわゆる「原因推量」の用法にしか言及しておらず、「らむ」の全てを説明し得ていない。確かに、成章が挙げている以下の証歌についてはこの説明で理解できる。

見えたる物                      隠れたることわり

① をみなへし秋のの風にうちなびき心ひとつをたれによすらむ（古今・秋上・230）

①の和歌は、女郎花が風の吹くままにあっちに靡き、こっちに靡きしているのを見て、「心ひとつ」を誰に寄せているのだろうと、女郎花が靡いている原因を推量している。

隠れたることわり                      見えたる物

② あはれてふ事をあまたにやらじとや春におくれてひとりさくらむ（古今・夏・136）

②の和歌は、春に遅れて一人咲く桜を見て、その理由を「あはれてふ事をあまたにやらじとや」と推量している。①②の和歌については、確かに成章の理論で説明できるが、次のような和歌は説明できない。

?

③ 萩が花ちるらむをのつゆじもにぬれてをゆかむさ夜はふくとも（古今・秋上・224）

③の和歌の傍線部は「萩の花が今頃は散っているだろう」と解釈できる。いわゆる「現在推量」の用法である。「萩が花ちる」は成章の言う「見えたる物」でもなければ、「隠れたることわり」でもない。むしろ「隠れたる事柄」などとも言えるべきものである。では、「らむ」についてはどのように考えるべきなのか。大野（1990）が次のように述べている。

(マ)

「らむ」の場合に大事なのは、目に見えない事態の推量をするということなんですね。だから、見えない事態の推量から、見えない理由を推量するというほうへ展開するわけです。理由というのもしっかり見えないものですから。<sup>(17)</sup>

すなわち「らむ」の本義は、表現者にとって「現在目前に見えていない事柄」を推量するところにあると考えられる。このように考えれば、先に掲げた①～③までの和歌を一括して説明することができる。

③の和歌における「萩が花ちる」は表現者にとって「現在目前に見えていない事柄」である。また、①の和歌における「心ひとつをたれによすらむ」は女郎花が靡いている原因を推量している。原因は表現者にとって「現在目前に見えていない事柄」である。さらに、②の和歌における「あはれてふ事をあまたにやらじとや」は、桜が春に遅れて一人咲いている理由を推量している。理由もまた表現者にとって「現在目前に見えていない事柄」である。このように、先の①～③の和歌は、全て「現在目前に見えていない事柄」を推量しているのである。いわゆる「現在推量」の用法であれ、「原因推量」の用法であれ、助動詞「らむ」が述語として現れた時の「文構造式」は、

ということになる。

この「文構造式」を踏まえると、『百人一首』でも馴染み深い紀友則の次の和歌も容易に解釈できる。

見えたる物

久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ（古今・春下・84）

波線部は「どうして（なぜ）、落ち着いた心もなく花が散っているのだろう」と、「どうして（なぜ）」を補って解釈するのが一般的である。「どうして（なぜ）」という重要な疑問語が省略されるなどあり得ないとして、この「らむ」を詠嘆<sup>(18)</sup>とする説もあるが、そのような説には従えない。「らむ」は表現者にとって「現在目前に見えていない事柄」を推量するものである。この和歌も「しづ心なく花のちる」のを表現者が見て、その現象が起きた原因、すなわち、表現者にとって「現在目前に見えていない事柄」に思いをはせているのである。文中にその現象が起きた原因が表現されていないので、現代の我々の言語感覚ではこの歌を単純に理解することが出来ず、「どうして（なぜ）」という疑問語を補って理解するしかないのである。この歌が詠まれた時代に生きていた人達は、別に「どうして（なぜ）」という疑問語を補わなくても理解できたのである。このように、現代人と昔の人の言語感覚の違いを、文法面からも触れていきたいものである。

## 7. 助動詞「らし」の「文構造式」

「推定」の助動詞と呼ばれる「らし」について、『あゆひ抄』では次のように説明されている。

「らむ」よりは確かに見定めながら心の落ち居ぬ言葉なり<sup>(19)</sup>

成章は「らし」について、「らむ」より「確か」であるとしか述べていないが、息子の富士谷御杖は父の説をさらに発展させている。御杖の『俳諧手爾波抄』（1807）には、

らんはむかふの内を察しやる心なり。らしはその内のもやうしかとはしれねど。大抵思ひあたたるゝ所をもつて察する詞なれば。<sup>(20)</sup>

とある。この御杖の説は「らし」の用法を的確に説明し得ていると思われる。「らむ」とは先にも述べたように、表現者にとって「現在目前に見えていない事柄」を推量するものであった。「らし」も「らむ」と同じく「現在目前に見えていない事柄＝むかふの内」を推量するのであるが、「大抵思ひあたたるゝ所＝何らかの根拠」をもって推量するのである。

る。文構造を図示すると以下ようになる。

根拠

現在目前に見えていない事柄

たつた河もみちば流る。神なびのみむろの山に時雨ふる→らし（古今・秋下・284）

この和歌は、表現者の目前に見えている「竜田川に紅葉が流れている」という情景を「根拠」にして、「きっと神南備の三室の山に今頃時雨が降っているだろう」と推量しているのである。このように「らし」とは、何らかの根拠をもって表現者にとって「現在目前に見えていない事柄」を推量する際に使われる助動詞と考えられる。従って、その「文構造式」は、

根拠

現在目前に見えていない事柄 →らし

ということになる。さて、「らし」は、先の「らむ」とは違い、現代も「らしい」という形で残っている。なぜ、「む」「らむ」等の推量の助動詞は消え、「らし」は現在も残っているのか。このような語彙史的なことにも、生徒の興味・関心を喚起させたいものである。

## 8. まとめ

以上、推量の助動詞と呼ばれる「む」「まし」「らむ」「らし」の4つについて、『あゆひ抄』の理論を発展させながら「文構造式」を示してきた。なぜ、「婉曲」という訳さない用法があるのか。同じ推量でも何が違うのか。このような問いに対し、「文構造式」を提示することによって生徒達に説明してきた。

繰り返しになるが、これからの古典の授業は「主体的・対話的で深い学び」に多くの時間を割くことになり、古典文法の指導に割ける時間はごくわずかである。よって、これからの国語教師には、生徒達に創造性を刺激する対話の場を提供するというファシリテーション力もさることながら、古典文法についても最小の時間で最大の成果を挙げるという高い指導力が求められてくるのである。そのためには、国語教師自身の古典文法に対する深い理解がより一層必要となってくると考えられる。先にも述べたように、中央教育審議会教育課程部会国語ワーキンググループでは、文法事項について「示し方に注意が必要である」という意見が出されていた。古典文法をどのように示すか。これからの国語教師が考えていかねばならない重要な課題であると考ええる。この明確さを追究した「文構造式」の実践が、これからの国語教師が古典文法を生徒に示す際の一助になればと考える。

※「文構造式」の作成に当たっては、時枝（1941）の「入子型構造」<sup>(21)</sup>を参考にした。

※本文中の和歌用例は、全て『新編国歌大観』の『古今和歌集』によった。

[参考・引用文献]

- (1) 文部科学省 (2016) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_0.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf)  
(2017年8月8日閲覧)、9-10頁
- (2) 前掲、9-12頁
- (3) 文部科学省 (2016) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について 別添資料 (1/3)」 「別添2-4 高等学校国語科改訂の方向性」  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902\\_3\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_3_1.pdf)  
(2017年8月8日閲覧)、6頁
- (4) 文部科学省 (2016) 中央教育審議会教育課程部会国語ワーキンググループ (第5回) 配付資料 3 「高等学校国語科改訂の方向性 (素案)」 「高等学校国語科科目構成の検討について (主な意見)」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2016/03/31/1369048\\_03.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/03/31/1369048_03.pdf)  
(2017年8月8日閲覧)、1-2頁
- (5) 文部科学省 (2017) 「高大接続改革の実施方針等の策定について」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/29/07/1388131.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/07/1388131.htm) (2017年8月16日閲覧)
- (6) 独立行政法人大学入試センター (2017) 「『大学入学共通テスト』マークシート式問題のモデル問題例 平成29年7月」  
[http://www.dnc.ac.jp/corporation/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka\\_test/model.html](http://www.dnc.ac.jp/corporation/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka_test/model.html)  
(2017年8月16日閲覧)、21-35頁
- (7) 前掲、2頁
- (8) 前掲、31頁
- (9) 「文構造式」については、拙稿「推量の助動詞の『文構造式』」『埼玉県高等学校国語科教育研究会研究収録第49号』(2009)及び「推量の助動詞の『文構造式』その2-「めり」は推量の助動詞か?」『埼玉県高等学校国語科教育研究会研究収録第52号』(2012)でも触れた。ただし今回、「文構造式」を一部修正したところもある。
- (10) 松村明編 (1969)『古典語助詞助動詞詳説』学燈社、154頁
- (11) 吉田金彦 (1973)『上代語助動詞の史的研究』明治書院、15頁
- (12) 竹岡正夫・中田祝夫 (1960)『あゆひ抄新注』風間書房、281頁
- (13) 前掲、284頁
- (14) 前掲、286頁
- (15) 国民精神文化文献七 (1940)『富士谷御杖集第五卷』国民精神文化研究所、617頁
- (16) 竹岡正夫・中田祝夫 (1960)『あゆひ抄新注』風間書房、288頁
- (17) 大野晋・丸谷オ一 (1990)『日本語で一番大事なもの』中公文庫、392頁
- (18) 本居宣長は『詞の玉緒』巻六で、このような「らむ」を「かなの意に通ふ」としている。(大野晋編 (1970)『本居宣長全集第五卷』筑摩書房、229-230頁)
- (19) 竹岡正夫・中田祝夫 (1960)『あゆひ抄新注』風間書房、293頁
- (20) 国民精神文化文献七 (1940)『富士谷御杖集第五卷』国民精神文化研究所、481頁
- (21) 時枝誠記 (1941)『国語学言論』岩波書店、240-241頁、等